

# LIBRA SQUARE

## Book

最近, おもしろかった本

### 『ロボット (R.U.R.)』

チャペック 作 千野栄一 訳 岩波文庫 588 円 (税込)

## 「ロボット」という言葉を 生み出したSFの古典的作品

これまで数多くのSF映画やテレビアニメやコミックにおいて、様々な種類のロボットが登場し、少年たち（時には大人たち）を虜にしてきた。

この「ロボット」という言葉は、一体誰が考え出したのか。そんな素朴な疑問に答えてくれる1冊の本がある。その名も「ロボット」。作者はチェコスロヴァキアの作家カレル・チャペック（1890－1938）。

この本によると、「ロボット」という言葉は、1920年に発表されたチャペックの戯曲「R.U.R.－ロッスムのユニバーサルロボット」（通称「ロボット」）において初めて使われ、世界に広められた。「ロボット」は、チャペックがこの戯曲の中の人造人間を表現するために作った新語であり、チェコ語の「賦役」を意味するrobotaの語末のaを取ったものである。

この戯曲の舞台はR.U.R.（ロッスム・ユニバーサル・ロボット）社。そこではロボットが大量に生産され、社会に流通されている。そして、それまで人間が行っていた労働をロ

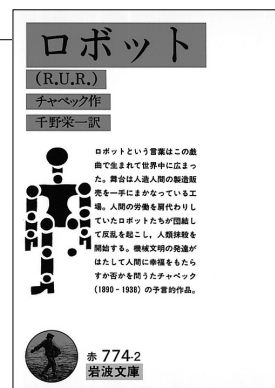
ボットがすべて行なうようになる。人間は、創造への努力を忘れ、勤労への意欲も失う。人間は次第に人間でなくなっていく。

これに対し、意志も魂もないと思われ、奴隷のように使われていたロボットたちは、実は人間と同じ心をもっており、むしろロボットの方が「人間」になっていた。そして、ついにロボットたちが革命を起こす。

ストーリー自体は他の作品でも目にするようなありふれた内容かもしれないが、そのような作品が1920（大正9）年当時に作られたということが驚きである。この戯曲が最初に発表された当時は、相当衝撃的だったであろう。

幼い頃、お年玉をはたいてロボットのおもちゃを買った方はもちろん、そうでない方にとっても、「ロボット」という言葉を生み出したSFの古典的作品として興味深い1冊ではないだろうか。

（会員 欽竹 昌利）



# Cinema

心に残る映画

## 『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』

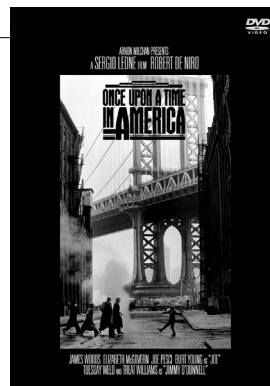
1984年／アメリカ／セルジオ・レオーネ監督作品

### 忘れられないシーンと音楽、 あふれた本当の名作

いい映画には必ず、一度見たら忘れられないシーンと、一度聞いたら忘れられない音楽がある。「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」は、そんな忘れられないシーンと、忘れられない音楽にあふれた、本当の名作だと思う。

主人公はユダヤ人の孤独な一人身の老人。演じているのは、ロバート・デ・ニーロ。この主人公のところに、政府の高官から、パーティーへの招待状が届く。心当たりのない主人公は、旧友を訪ね、過去の回想を始める。幼少時代、1920年代のニューヨークで、親友達、初恋の女性に出会ったこと。青年時代、1930年代、禁酒法時代のニューヨークで、親友3人と、本格的なマフィアとなって、一大組織を築き、この世の春を味わったこと。初恋の女性をめぐる悲恋のこと。そして、組織が大きくなるにつれて、親友と意見の対立をし、やがて、主人公のミスにより、親友3人が警察に撃ち殺されてしまった悲劇のこと。これらの過去と、主人公の現在を対比させながら、ストーリーが進んでいく。

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』DVD  
価格：3,129円(税込)  
発売：ワーナー・ホーム・ビデオ



特に忘れられないのは、ラストシーンだ。この映画のラストは、挫折した主人公達の人生を丹念に描いた後、最後にもう一度、主人公の青春時代に戻り、若い主人公が、アヘン窟でアヘンを吸ってまどろむところで終わるのだが、そのときの主人公の屈託のない笑顔が、最後の最後で、ものすごく感傷をそそる。

また、映画を通して流れるエンリオ・モリコーネの音楽が、さらに映画のムードを高めている。

友人からお勧めの映画を聞かれたときに、いつもこの映画を薦めるのだが、4時間の大作なので、みんな、なかなか観ようとしなない。

私自身は、5回以上この映画を観ていると思うのだが、時間があれば、あと何回でも観てみたいと思う。歳をとってから観れば、また主人公の気持ちがもっとわかるようになるかもしれない。

(会員 濱須 伸太郎)